

# 和文英訳五十年

南 石 福 二 郎

日本精神の英語表現が和文英訳であるとするならば、和文英訳ほど至難の業はない、また和文英訳こそ英文学および英語学——日本人学徒の英文学および英語学——の最終目標であるといっても過言ではないとおもう。世界文学史上翻訳の名作が幾多ある。1611年に刊行された The English Bible, すなわち The Authorized Version または King James's Version として知られているものごとき、けだしその最たるものであろう。日本の文書を英訳したものには Basil Hall Chamberlain の「古事記」を英訳したものが、1882年に刊行されている。これは literal translation として恐らく範とすべきものであろう。近年に至って「源氏物語」の英訳や川端康成氏の「雪国」の英訳が普く世に知られているが、これらはいづれも英語を母国語とする人によって成された作品である。日本人の手によって成された和文英訳の作品としては、明治23年に公布された教育に関する 勅語 の英訳を挙げることができる。これは明治44年に公文書として文部省から刊行したものであるが、これには菊池大麓、神田乃武、末松謙澄、新渡戸稲造、伊東巳代治の五氏が命を受けて当り、主としてこれを海外に普及し国内諸学校にも頒布したのである。これは一字一句もいやしくもしないという典型的な literal translation であって、勅語原文の文体に劣らぬ荘重の文を成している。而も冒頭の「朕惟うに」との起句を“Know ye”という Imperative で起こし、“Our subjects” といつて Address する Situational translation を敢行している点、流石にと敬嘆せざるを得ないものである。筆者は明治36年頃(1903)徳川家康の遺訓として伝えられるものの英訳を試みたことがある。その後これに幾度か時折筆を加え、時にはこれを全く書きかえなどして1914年すなわち大正3年に一通りまとまったものが次に掲げるものである。

### 東 照 公 御 遺 訓

人の一生は重荷<sup>おもに をふ</sup>を負て、遠き道をゆくが如し。いそぐべからず。不自由  
を常とおもへば不足なし。ここに望<sup>こんきゆう</sup>おこらば困窮<sup>いだ</sup>したる時を思ひ出す  
べし。堪忍<sup>かんにん</sup>は無事長久<sup>もとる</sup>の基。いかりは敵<sup>かつこと</sup>とおもへ。勝事ばかり知てまく  
る事をしらざれば害<sup>がい</sup>其身にいたる。おのれを責<sup>せめ</sup>て人をせむるな。及ばざ  
るは過<sup>すぎ</sup>たるよりまさされり。

(漢字、仮名づかい、ふり仮名、すべて「大日光」24.昭和40年発行東照官350年祭記念号  
(1) 所載による)

### IYEHASU'S TEACHING

Life is like a journey which a man takes heavily burdened over a long distance. Hurry not. When you are wanting think it to be your lot, and all complaints will fade away. When ambition arise in your mind remember the time of need. Forbearance is the foundation of peace forever. Wrath is your enemy. Woe be unto you if you know how to win and know not how to be won. Accuse yourselves instead of somebody else. Things done short would be better than things overdone.

その後五十年時々思い出ししては加筆修正を重ね、時に原文の意味を検討し、例えば「いそぐべからず」の「べからず」は“you must not”の意味であるか“nobody can”に該当するのかななどを色々な角度から考えた。殊に「勝事ばかり知りて」云々は1945年の敗戦により身をもって実験したことである。そして1965年に一と通りまとまったものが下記の訳文である。

### PRECEPTS BY SHOGUN IYEHASU OF TOKUGAWA

Life is like a journey to be taken over a long distance havily packed. Never be in a hurry. When you find yourself not sufficiently supplied,

why, take the situation to be your lot, and there will be nothing to complain of. When some desire calls on you, recall how bitterly in need you once were. To forgive is the root of peace forever. Beware lest your passion turn out your deadly enemy. If you are always too sure of winning to scent an occasion of possible defeat, there will be certain ruin ahead of you. Find fault with yourself before you do so with anyone else. I would rather have things underdone than overdone.

1965年すなわち昭和40年には恰も日光東照宮の鎮座 350年祭が行われるというので筆者は上記1965年英訳を記念事業委員長徳川宗敬氏を経て奉献した。併しながらこれは決して完璧などといえるものではない。forever done short, or underdoneである。まだまだ improve しなければならないところが、ここかしこあることであろう。完璧ならざるものを敢て神前に供えるとは怪しからぬとの非難は、自ら起こしておるのであるが、東照公おん自ら “I would rather have things underdone than overdone” と仰せられているのであるから、それに励まされて奉献を決行したのである。そこでその後の improvement を加えて、現在1969年の12月にあるものが下記の訳文である。

PRECEPTS OF IYEFYASU TO HIS POSTERITY  
OF THE HOUSE OF TOKUGAWA

(Revised in 1969)

Every man is a sort of traveling all his life long under burden over a long distance. There is no use of hurrying up. Let everybody consent to a life in want, and there will be nothing to complain of. Should there be a call of desire on you, recall in what bitter need you once were. Know that to forgive is the root of peace forever. Be on your guard against ill temper as if it were your deadly enemy. Don't be too sure of winning. Beware lest you lose perchance, or there will be certain ruin at your door. Find fault with yourself before you do so with anyone else. I would rather have things done short than overdone.

本稿の冒頭に提唱した「日本精神」とは the Japanese mind であって、2000年にわたり培われてきた文化すなわち国民的教養による認識と、物の考え方、感情ならびに志向を指している。これを理解し体得するもの日本人に如くはない。「英語表現」とは英文学史上伝えられてきた一切の詩、劇および各種散文に用いられた simile, metaphor, personification, hyperbole, innuendo, synecdoche, mytonymy その他の aesthetic arts を包含する currnt standard English usage に規制され、その上に effective なる表現であって、原文と対決して事実の認識や、評価や、思想や感情を再現するのに intellectually に、また emotionally に、殊に situationally に適切であり該当するものであることを要する。若し夫れ英語学的な判断と英文学的な考慮を用いない mechanical な翻訳をもって和文英訳というならば、それはある程度 useful なものではあり得るが、学問としてどれだけの価値があり得るかは頗る疑わしい。

家康が人生を旅路になぞらえたことは “As you Like It” の Act II, Scene vii に Jaques の Duke に対する speech “All the world’s a stage etc. etc.” と思いを合わせて興味あることである。是れは配所の森に尚も希望に生きる主君を慰め且つ励ます忠臣の声であり humorous な中に truthful なひらめきがある。前者は剛勇以て天下を平げ英知以て江戸幕府の基を定めた武将の知恵である。後者が文豪の創作であるのに対し前者は史上実存の人物の生の声である。この書き出しの一文につき史家中村孝也博士は「大日光」記念号に下記の通り書いている。

「秀吉が大業を成し遂げて死んだのが六十三歳であるのに対し、公は六十二歳でようやく多年考へていた仕事に着手したのであるから、ずいぶん立ちおけている。彼は重い荷を負うて、急がず、あわてず、一步一步足を踏みしめて、ここまで来たのであるが、この仕事を完成するために公は同じような速度を以て更に十三年という年月を重ねたのであった。」

原文の「堪忍」に対し “forgive” なる英語を配したのは、おのれの愛を發揮して相手者の不義を解消し、双方の義を完うするという高度の倫理行為が、「堪忍」と “forgive” との両語に共通して表現されると認められるからである。昭和20年8月14日附で15日正午玉音放送を以て発布された終戦の詔書に「堪へ難きを堪へ、忍び難きを忍び、以て萬世の為に大平を開かんと欲す」とのたまわれたのが堪忍であり、キリ

ストがその弟子たちに「汝等斯く祈れ」と教えられた、その祈りの中の願いの部分の  
 一が“Forgive us”であり、その願いを裏付ける覚悟が“as we forgive”である。  
 「怒は敵」の実例が家康から五代の孫である綱吉將軍のとき江戸城内で生じた。それ  
 は赤穂藩主浅野長矩が松の廊下で刀の鞘を払ったというので切腹改易に処せられたこ  
 とである。敵は吉良上野介だというので大石良雄以下47名の仇討ちとなったのである  
 が、何ぞ知らん、真の敵は内匠頭自身の中にあった腹の虫であった。つまり虫の居所  
 が適当でなかったことの結果なのである。それで「虫の居所を常によく調整してお  
 け」というのが教訓の趣意である。これを *psychologically* にいえば、“Guard  
 against ill temper”ということになる。若しくは“Beware of”というべきところ  
 である。先にも書いたことであるが、「害其身に至る」とは日露戦争以後40年間日  
 本国民が慢心に酔いはてて自ら *ruin* を招いたのが正にそれである。われわれは今  
 日尚油断をしてはならない。前門には虎があり、後門には狼がある。正に“at the  
 door”である。「及ばざるは過ぎたるよりまさり」とは正に進歩の極意を喝破し  
 た言葉である。

産業の開墾、国運の隆益、学問の達成、人格の修養、その期する所は完成に在り、  
 而も現実には永久に“done short”である。若し夫れ“done perfect”というならば、  
 それは「行き詰まり」であり、“no more”である。“forever more”こそが進歩の妙  
 諦であり、“forever done short”の嘆きこそが“everlasting life”につながる  
 のである。キリストがその弟子たちに教えて“Be perfect as your Father in  
 heaven is perfect”と仰せられたのはその正に志す目標を示されたものである。そ  
 してその在るべき behavior については、“Blessed are the poor in spirit”であ  
 って、そこにこそ完成の秘訣があることを教えられたのである。すなわち、“for  
 theirs is the Kingdom of heaven”である。パウロがピリピ書第三章に書いている  
 “One thing I do, forgetting what lies behind and straining forward to  
 what lies ahead. I press on toward the goal for the prize of upward call  
 of God in Jesus Christ”こそ Christian progress の要諦である。家康が「及ば  
 ざる」云々をもって遺訓の結語となしたのは流石に武将六十年の実験をもって子孫を  
 諭すに応わしきものである。「過たる」とは何であるか。これは「下剋上」と「独断  
 専行」である。往時陸海軍が日本にあった時これら軍人を支配していた指導精神は軍

人に賜わった勅諭であって、その中心観念は絶対服従であった。またカトリック教職の宣誓の一は絶対服従であると聞く。この絶対服従を超えた「下剋上」と「独断専行」は取りもなおさず自己を指揮者の上に位置づけることである。昭和六年満洲事変の発端およびそれにつづいて起った陸海軍の歴史は軍人たちの下剋上と独断専行によって綴られてきた。今日日本のキリスト教界に見る嘆かわしき状態は Protestant の弱点を暴露したもので、自主独立を押し進めて行くうちに何日の間にか知らず知らず自己をもって聖書を override する 過に陥った「過ぎたる」の例である。和文英訳にも「過ぎたる」ものがある。overdone translation が応々にある。translator は原文の中に書いてないことを訳文の中に書いてはならない。原文の中に書いてはないけれども suggest されていることを express することは時に必要であることがある。これは訳者の識見によって適当になされる。また原文そのままを訳したのでは意味が通ぜず、訳文が何の役にも立たないことがある。そういう場合には訳者が必要なる注解を附記することが許されるどころではなく要請される。けれども訳者が原文作者の先輩となって前面に立ち、時には原文を無視した英文を草するに至っては、その英文が如何にすばらしいものであっても、それは「過ぎたる」訳でしかない。これは大に戒めなければならない。

大正の終であったか、昭和の始頃であったか大阪外国語学校に Glen Show という米国人の講師があって、山本有三の作品を材料に和文英訳の演習を指導しておられた。Professor Shaw は常々“Literal translation is best” といって学生に教えていたが、それは学生がややもすれば free expression によって原文を逸脱する過を犯さぬようにとの戒と考えられる。literal translation については、Lafcadio Hearn が literal translation が可能であることは文学を評価する基準であると、同氏の論説のどこかに述べておられたことが思い出される。なるほどそういえば英訳聖書は Authorized Version でも Revised Standard Version でも literal translation であり、聖書解釈学の主要なる事業が literality の検討にあることによっても、literality が翻訳の定規であることは論を俟たない。が、それは Hearn のいうすぐれたる文学作品についてのみ適用される原則である。翻訳の目的は意志の疎通にある。日本人が日本語に表現されてある作品——広い意味でいう。必ずしも文芸作品といわず、一切の文字——を読んで受ける印象と同じ印象を、英語を母国語と

している人に与えるのに応わしい英文を草するのが、和文英訳の目的である。それには原文を (a) 事実の認識の面から、(b) 思想の面から (c) 感情の面から分析し、分析したものを英語の立場から検討し且つ総合しなければならない。斯くして出来上がったものを原文と対比して最後の仕上げをなす段階において *literality* の適用が考えられなければならない。